慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	塵芥雑話 : 巻頭言にかえて
Sub Title	Preface
Author	坂上, 貴之(Sakagami, Takayuki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2019
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.142 (2019. 3) ,p.3- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 坂上貴之教授 退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000142-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

塵芥雑話[1]

――巻頭言にかえて――

坂　上　貴　之*

大学を退職するにあたり，記念号を出していただけるという．それだけでも身に過ぎる果報なのに，巻頭言も書いてよいとのこと．おそらく身二つ分以上の責任感をもってやり遂げねばならないところだが，当人は辞めていく者の気楽さで引き受けてしまった．短い時間だが，私の雑話に付き合っていただきたい．

経済的効率性は強靭な学問・文化を創造するか

昔，私立大学連盟というところのある部会に出入りしていたことがある．同じ部会の経済学者から大学教育をもっと経済的な効率性から考えるべきだと言われ，えらく反発した覚えがある．大学を「競争原理」の下において鍛えていくことの必要性が唱えられ，一連の「大学改革」が始まった時期である．考えてみれば，そうした大学改革とずっと一緒に，大学での自分の教育や研究は走ってきた感がある．この「改革」の不思議さや奇妙さについては，すでにいろいろなところで語られているので，ここでそのことに触れるつもりはない．しかし大学のような，言わば文化創造に関わる機関のありようを，その構成員である教員が，競争原理や経済的効率性からとらえようとすること自体への危機感を，当時，持ったことは強調

[1] 夢うつつの中で，「護美の戯言（ごみのざれごと）」という題目が浮かんだが，あんまりなので少し尤もらしくした．

* 慶應義塾大学文学部　心理学専攻

しておきたい．

行動を制御する要因を考えるうえで重要とされる行動分析学の「随伴性」という概念は，行動それ自体とそれを支える環境とが，時間の流れの中で互いに互いを変化させつつ，ある文様を織りなしていく様子を描き出す．文化を築く行動の１つである学問に関わる行動も，その随伴性の中で織りなされた文様の１つであり，企業を通じた組織的行動や日常の経済的な行為よりも，はるかに長い時間的スパンを持っている．たとえばある学問を外から導入し定着させ，それに基づく新しい知を創出するに至るまでには，ゆうに数世代に亘るその学問の継承が必要となる．

長い時間的スパンを持つとは，結果は出にくく，変化もゆっくりとしていることを意味する．しかし同時に，そうした長い時間をかけて作り上げられる文化の随伴性が，様々な「耐性」を持っていることをも指している．したがって長い歴史を持った大学に，こうした「耐性」が見られるのは偶然ではない．この「耐性」を「改革」への抵抗と読むのか，それとも文化を醸成する「城郭」と見るのか，大学の構成員は自らを「点検」しなくてはならないだろう．

プロクルーステースの寝台

「大学改革」の一環としてなされた「授業改革」は，私にとって最も理解が難しいものであった．文学部の学習指導主任や日吉主任を務めていた頃，半期制が議論され，最終的には導入されることとなった．過去に大学生の実態調査や奨学金制度の調査に携わった縁で，また実際に自分が留学していた時の経験で，海外の大学の教育制度についていろいろと知る機会があり，半期制についても人並みに理解はしていたつもりであった．しかし，おそらくこの制度は，これまで全期制を採ってきた日本の大学教育には向かないだろうと思っていた．

その理由は簡単である．日本の大学は元々，ヨーロッパ型の，ある種の

知的エリートの育成を目指した制度を採用してきた．しかし戦後，大衆社会を背景とするアメリカ合衆国の大学制度が導入され，多くの私立大学が多量の学生を抱え込んだ．大講義室での何百人という学生向けの「受動的」な授業形態は，資金的な余裕のない大学の施設やスタッフの貧弱さが生んだものと考えられる．他国と比較して量も質も桁違いに高いアメリカの大学における教育制度は，学生への政府の直接的な奨学金や大学自体が有する豊かな資金に立脚しており，量も質も及ばない我が国の大学では，その「本当の」実現は難しいのである．たとえばアメリカの半期制は，週に１つの科目について複数回授業を行い，心理学でいう集中学習の効果に立脚したデザインとなっているが，日本でそれを実現できる，広いキャンパスと十分な教室数・教員数を持つ大学はほとんどない．

こうした制度実現のための物理的経済的な前提を作り上げることなく，新しい制度を実施すれば，おそらく貧弱な教育基盤に合わせてこれまでかろうじて「日本型」全期制によって実現してきた高等教育は，表面的には新しい装いを纏いつつ，根本のところから徐々に崩れていくであろう．私は，多くの大学教員が無理を承知で，この制度にどうにか自分の行いたい教育を合わせようと努力していることを知っている．しかし１年をかけて次第に知識や専門用語を積み上げつつ，ある学問の魅力を理解させていった全期制と同じことを，単純に春学期と秋学期の２つに割った半期制によって実施しようとするのは，ほとんど不可能に近い．

同様なことは，学生の総合成績評価を求めたGPA制度にも当てはまる．GPAは大学教育における個人の達成度を総合的に見る指標として用いられ，本来は，学習指導の必要性の有無をその指標から決定し，学生との密度の高い面談を含むサポート体制の一環であったが，今や単なる学業成績の序列判断の材料と堕している．シラバス作成のように学ぼうとする学生にとって有用な手がかりを生み出す「改革」もあったが，それらがもたらす深刻な影響に目をつぶって形式だけを整えようとするならば，どれもが

大学が本来作り出さねばならない随伴性の足を引っ張ることになろう．

査定と評価のない改革

やはり大学での会議の席上である．上のような持論を持つ私にとって，半期制やGPA制度などの「授業改革」は，日本の大学教育にとって百害あって一利なしとみていたので，それらを推進しようとする会議の流れには何か言うべきと考えていた．そこで私は，それら「改革」の効果を何らかの形で査定していってほしい，そしてその結果を評価しつつ制度運用を進めてほしいと提案した．しかし，すでにこれらの諸「改革」を進めている学部からは，嘲笑とともに，何でいまさらそんなことを言いだすのか，とか，そんなことを言うから「改革」が進まないのだ，という反論（？）が返ってきた．私は何とその場では守旧派となったのである．

災害や事故が生み出した被害金額や犠牲者といった負の結果，製品やサービスがもたらした故障などの不具合や使いにくさの報告，こうした具体的な「失敗」の姿は，査定され，過程が分析され，評価されたうえで，改善が施される．それと比較して，大学の教育制度や研究制度というのは，制度変更による影響が多様で膨大であり，因果関係を特定することが難しい．そのうえ何が「失敗」なのかを定義しにくく，ゆえに「改革」による効果は査定できないとされやすい．しかし本当にそうであろうか．定義できないもの，査定できないものを，私たちは果たして「改革」できるのだろうか．

おそらくそうではない．制度の推進者たちは，そして結局，私も止めることができなかったという意味でその一人となってしまったが，「しにくさ」に拠りかかることで，その制度の検証を回避しているのであろう．失敗も成功も分からない（ことになっている）教育制度の「改革」が行き着く先は，最悪の場合，高等教育の形骸化と研究者の養成基盤の喪失である．

契機に回り逢えるチャンスの場

そして，これを言ってしまうと今までの話は何なのかとなるのだが，「改革」の対象となっている大学教育そのものが学生に深い影響を与えているかどうかは，実ははっきりしないのである．何十年も経過した後の大学時代の記憶というものが，その影響を測る上で適切かどうかには問題があるものの，たいていの元学生は教員の冗談や雑談，酒席での話題の内容は鮮烈に思い出しても，授業内容はさっぱりなのである．しかしそうであっても，彼らは大学や大学院時代が自分にとってかけがえのないものだったと考えている．かく言う私も，その一人である．私の師であった佐藤方哉さんが亡くなられたときに書いた追悼文を読むと，そのほとんどが，酒席での話題で占められていることにいまさらながら驚く．もしも大学教育が深い影響を与えないのであれば，どんな「改革」でも大して害を及ぼすことはないようにも思える．

ならば高等教育機関で与えられる教育とは何なのだろうか．1つの答えは，学問をすること，文化を創造することの，ただの契機を作ることだろう．契機は常に忘れ去られる．何が始まりだったのかは，あとで捻りだされることはあっても，意識に直接上ることはない．私たちは常に契機の後，つまりその手がかりの下で開始された振舞いの結果を，覚えているだけのように見える．そう考えると，「改革」によって潰されてほしくないのは，教員によって提供される良質な契機と，それに回り逢えるチャンスということになる．あとは，それと受け止めた側が自分で勝手に進めてくれるはずである．

福澤諭吉ではないが，大学・大学院時代の私は「酒と烟草と両刀遣いに成り果て」ていた．おそらくは師の言っていた「酒と煙草を嗜まない奴は学問する資格はない」を錦の御旗に，無頼を気取っていたのであろう．しかし，先に述べたように，酒席はそれ以降の私にとって，幼稚園児の砂場

にも匹敵する，先達，同僚，学生との重要な交流の場であった．決して呑むことを勧めるわけではないが，緊張が解けて話しが弾む中での交流は，多くの共同研究を生み出す契機となったし，それは今も変わらない．正規の授業でなされたものの何十倍もの量の雑話によって織りなされた随伴性は，最終的には私の研究の営みを支える「文化的な」基盤を醸成することになった．その意味で，自身の退職に際して，寄稿された執筆者の方々をはじめとする，私との交流に参加してくださったすべての皆さんに，此処に感謝の意を表したい．

2018 年 12 月吉日